

Title	知覚の"時間的"諸相に関する試論
Sub Title	A tentative consideration on some "temporal" aspects of perception
Author	境, 敦史(Sakai, Atsushi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2013
Jtitle	哲學 No.130 (2013. 3) ,p.41- 57
JaLC DOI	
Abstract	The term "time perception" is anomalous in that we cannot perceive time in any case, and in that time doesn't exist in the environment as what to be perceived. As Gibson pointed out, time is understandable but is not perceivable, since time is a concept. Perceived events or facts exhibit some "temporal" aspects what are conceptualized into time. A tentative list of such "temporal" aspects is proposed here. Time doesn't continue to exist or flow, but we, the organisms, continue to perceive in the environment and to produce time as a concept.
Notes	特集：渡辺茂君・増田直衛君退職記念 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130-0041">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000130-0041</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

知覚の“時間的”諸相に関する試論<sup>1</sup>境 敦 史<sup>2</sup>A Tentative Consideration on  
Some “Temporal” Aspects of Perception*Atsushi Sakai*

The term “time perception” is anomalous in that we cannot perceive time in any case, and in that time doesn't exist in the environment as what to be perceived. As Gibson pointed out, time is understandable but is not perceivable, since time is a concept. Perceived events or facts exhibit some “temporal” aspects what are conceptualized into time. A tentative list of such “temporal” aspects is proposed here. Time doesn't continue to exist or flow, but we, the organisms, continue to perceive in the environment and to produce time as a concept.

## 1. はじめに

本稿では、「時間の知覚とはいかなる事柄か」を問う。「～とは何か」という問いは、それに対する「答え」が名詞（句）でなければならないという形式的制約を、「答え」が名詞（句）であるという確証もないまま自らに課しながら、提案された「答え」が（例えば、「人間とは、考える葦であ

<sup>1</sup> 本稿は、増田直衛教授と著者との共同企画により2012年9月13日に『「時間知覚」再考—「時間」とはいかなる事柄か—』と題して開催された、日本心理学会第76回大会ワークショップにおける著者の話題提供の内容に加筆したものである。

<sup>2</sup> 明星大学人文学部

る」のように)さらなる疑問を生むという宿命を帯びているからである。

「時間の知覚」とはいかなる事柄か検討することは、(1)「知覚」をいかなる事柄と見なすか、(2)「時間」をいかなる事柄と見なすか、という関連し合う二つの問いに対して、ある立場を表明することに他ならない。本稿ではまず、(1)についての見解を明らかにしたうえで、(2)について検討することとしたい。というのも、(2)に対する答えは、(1)に対する答えを先に決めれば自ずから限定されるが、先に(2)に答えようとすると、考察は無限に拡散し得るからである。

## 2. 知覚とはいかなる事柄か—「時間の知覚」という語法の変則性—

「明るさの知覚」、「重さの知覚」、「色の知覚」、「形の知覚」、「音の大きさの知覚」といった言葉は、知覚の心理学において一般的に用いられる。「明るさの知覚」とは、「明るさを知ること」であり、「重さの知覚」とは「重さを知ること」である。これらは全て「～を知ること」と言い換え可能であり、「明るさを知ること」がいかなる経験であるか、「重さを知ること」がいかなる経験であるかは、私たちにとって非常に明確である(例えば「重さを知るとはどういうことか、経験したことがない」と主張する人は、おそらくいないであろう)。

一方、「時間の知覚」という言葉も、通用してはいる。しかし、「時間の知覚」を、上の緒例と同じように「時間を知ること」と言い換えることは、不可能である。例えば、「楽しい時間は速く過ぎる」という常套句は、「楽しい時間」そのものが「明るさ」や「重さ」と同じように明確な体験として感じられるという意味ではない(楽しい出来事は、明確に感じられる)。また、「今、猛烈な速度で“楽しい時間”それ自体が過ぎていくのが感じられる」という意味でもない。私たちは、「楽しい出来事」が過ぎ去った後に時計を用いて時刻を確認し、思いのほか「長い時間」が経過し

ていたことを知って、そのような感懐を抱くのである（「長い時間」が時計の針の大規模な位置変化から抽象された概念であることについては、後に述べる）。

このことこそまさに、「時間の知覚」という用語が変則的であることの証左である。私たちは、「今ここで見ている灯り」について、「まぶしい」とか「薄暗い」と知るのであり、「今ここで持ち上げている鞆や書籍」について、「重い」とか「軽い」と知る。しかし私たちには、「今ここで過ぎて行く時間そのもの」について、それが「速い」とか「遅い」と知ることができない。知覚は、原則として、「今ここ」からの外界についての認識であると同時に、「そのように外界を認識している自己」についての認識でもある。私たちは、「今ここ」にいる自己を基点として、外界や対象について「明るい」とか「重い」と知る。それと同時に、「明るい」とか「重い」と知りつつある自己を認識している（Gibson, 1982, p. 167）。（但し、「今」は、「過去」と「未来」の境界を成す瞬間的接合面などではない。「今」は、「しばらくの間」として存在し、私たちは、しばらくの間観察しないと知覚できない。）しかし、「時間の知覚」については、この原則は、あてはまらない。「今ここで、まさに過ぎ行く時間そのもの」を知覚することはないからである。

さらに、「時間を知ること」とは、「時計を見て時刻を知ること」ではない。それは、例えば、「錘の重量を秤の目盛りから読み取ること」を「重さの知覚」とは言わないのと同じであって、このことから、知覚とは基本的には「徒手空拳のままで知ること」だと言える。明るさ、重さ、色、形、音の大きさなどは、私たちが徒手空拳のまま知り得る事柄である。

また、「ヒトが徒手空拳でありながらも時計 [を見ているか] のように正確に時間（の経過や持続）を知れること」も、（このようなことが可能か否かは措くとしても）知覚ではない。「外界に設定された基準に対して正確であること」は、知覚の要件ではないからである。私たちは、全ての

知覚について、(何らかの基準に合っているか外れているかという意味において) 当否を確認したりしないし、確認することを仮に欲したとしても不可能である。従って、知覚には、「正確な知覚」も「間違った知覚」もない。(例えば、幾何学的錯視は、「私たちには、物理的世界の特性を正確に認識することができない」とか、「私たちは、物理的世界の特性を誤ったかたちでしか知り得ない」といったことを示しているのではなく、「物理学的な記述では、私たちの知覚を的確に捉えられない」ということを示している。)

さらに、しばらく観察していないと知覚は成立しないという事実がある。実験室で特別な装置を用いて呈示される瞬時に消え去る画像は、非常に特殊な経験であり、日常の生活において私たちは、しばらくの間観察を続けながらでなければ、自分たちの経験について語れない(このことを、知覚の「時間」性と呼べるかもしれないが、これについては後に検討する)。

### 3. 私たちはいかなる事柄を知覚し得るのか

アリストテレスは、「感覚器官を通じて感覚されるもの」即ち「感覚対象」を、(1)ある一種類の感覚器官だけを通じて経験される、色・音・匂い・味のような「特殊感覚の対象」と、(2)複数の特殊感覚で共通に経験される「共通感覚の対象」とに分類し、「共通感覚の対象」として、運動・静止・数・形・大きさ・時間を挙げている(山本, 1977, pp. 90-91)。

「私たちには、時間を知るための感覚器官が備わっていないが故に、時間が知覚できない」とする主張は、「共通感覚の対象」として認識され得るとアリストテレスが主張した「時間」も含めて「時間」とはいかなる事柄を指すのか十分に検討しないまま、「時間」を知覚するための「特殊感覚器官」が私たちに備わっていないとするアリストテレスの第一の指摘のみを受け容れていることになる。アリストテレスが「時間」を運動と同

列に扱って「共通感覚の対象」に含めたのは、時間を、運動そのものではないが（自己の活動と外界で生じる運動との両者を含めて）「運動なしにはあり得ないもの」（山本，1977，p. 61）と捉えていたからだと考えられるが、このことは看過されてしまうのである。

「私たちはいかなる事柄を知り得るのか」という認識論的な問いは、「知られるべく存在するのはいかなる事柄か」という存在論的な問いと不可分である（Lombardo, 1987）。布伦ターノの「志向的内在」という考えは、知覚を環境に向けられた行為と捉え、知覚が環境に存在する知覚対象をも含んでいることを指摘している。言い換えれば、知覚は、「身体や脳に内属する心像」ではなく、「外界に存在する知覚対象との関係として環境に成立する行為」である。このように考えると、知ることについて問うことは、知られるべく環境に存在する事柄について問うことを避けては成立し得ない。従って、「私たちは、時間を知覚し得るのか」と問うにあたっては、「時間は、知覚されるべく環境に存在するか」と問わねばならない。

#### 4. 「時間」は、知覚されるべく環境に存在するか

松田（1989）によれば、「物理的時間の経過に対する知覚作用を一般に時間知覚《time perception》といい、知覚された時間は、物理的時間に対して心理的時間《psychological time》と呼ばれる（松田，1989，p. 292）。つまり、「心理的時間」は、物理的時間を基準として定義されているので、物理的時間が存在しなければ、心理的時間も存在しないことになる。（「物理的時間」が、万物に遍く等速で不可逆的に一方向に流れる絶対時間を前提としているとすれば、「絶対時間が存在しなければ、心理的時間も存在しない」ことになる。）従って、「心理的時間」の研究とは、物理的時間が絶対的に（即ち、生活体の知覚や行動といった営みとは独立に）存在すると無条件に認めた上で、物理的時間の「心理的」性質を論じる行為だと言える。

しかし、「物理的時間」という概念を「私たちが現実に操作できる実体」として通用させているのは、時計である。心理学実験においては通常、実験者は、視覚的・聴覚的な事象を、「持続時間」を決めて生起させ、それら事象についての判断や評価を観察者に求める。しかしその際、実験者は、絶対時間の存在を信じたり、そういった概念を信奉している必要などない。「物理的時間」を実体化するのは、時計やそれが組み込まれたコンピュータであり、実験者は、それらを利用して、「呈示時間」や「持続時間」や「刺激間隔」を決定し、「反応時間」を測定する。実験者が「物理的時間」の根拠としているのは、遍在する絶対時間ではなく、時計の表示値の単調増加である。

このように、実験者が絶対時間という概念を信奉しているか否かに関わらず、心理学において「心理的時間の基準」に据えられている「物理的時間」は、時計という装置の、単調に増加する表示値である。従って、それを基準として測定される「心理的時間」は、当然ながら、「単調増加する表示値という基準からの逸脱」でしかない。「物理的時間」が概念である限りにおいて、その関数としての「心理的時間」もやはり概念に留まるのである。

松田（1989）の定義では、心理的時間とは「知覚された時間」と見なされるが、それはいかなる事柄か。既に挙げた、「楽しい時間は速く過ぎる」という常套句は、心理的時間の特質を表しているとされる。また、ひなびた温泉宿の紹介などで、「都会の喧噪を離れたゆるやかな時の流れ」といった表現を目にすることもある。これらに従えば、「物理的時間は一定の速度で進むが、心理的時間は加速したり減速したりする」ことになる。しかし、既に述べた通り、環境においては、物理的時間が等速で流れているのではなく、時計の表示値が単調増加しているのである。「今ここでまさに過ぎ行く楽しい時間そのもの」が私たちに知覚できないのは、そのような「時間そのもの」が、私たちに知覚し得るあり方で環境に存在してい

ないからである。

「楽しい時間は速く過ぎる」という感懐は、「楽しい出来事が終わったことの知覚」と、その後の「時計の針の位置の知覚」とを前提として成り立つ。つまりこれは、「何かに夢中になっていると、時計の針位置を確認する行為が起きにくくなる」ということである。「心理的時間が速く進んだ」のではなく、「時計の針の位置が、時計を見ないでいるうちに大きく変化していた」と記述すれば、「心理的時間」という言葉は不要になる。(1)「物理的時間」は、時計の表示値の単調増加に支えられて実体として通用している概念であり、知覚される対象としては環境に存在しない。(2)「心理的時間」は、そのような単調増加する値からの逸脱として規定される、やはり概念である。従って、心理的時間の特質を言い当てていると見なされている、「楽しい時間は速く過ぎる」という常套句は、(1) 実在しない物理的時間の等速性という概念と、(2) 物理的時間からの逸脱としてやはり概念として成り立つ「心理的時間」との双方を前提としている。この意味において、このような常套句は、私たちの知覚に関する記述でも、「時間」に関する現象学的な記述でもない。さらに言えば、この常套句を「心理的時間」の特質を言い当てていると見なす立場こそが、「物理的時間の対件としての心理的時間の性質についての探求」という誤った問いへの誤った答えを提供することで、さらに重要な問いについての探求を放棄させる役割を担っている。さらに重要な問いとは、「概念でしかない時間があたかも実体のごとく語られる根拠はいかなる事柄か」、また、「“時間”の名の下に知覚されているのはいかなる事柄か」という問いである。

## 5. 時間を知覚することはできない

アメリカの知覚心理学者、J. J. ギブソンは、『事象を知覚することはできるが、時間を知覚することはできない』という端的な標題を冠した論文において、「時間」は概念であるが故に、「時間」の概念を理解することは



できて知覚することはできないと主張している (Gibson, 1975).

ギブソンによれば、時間と空間はそれぞれ、事象と面という知覚内容から抽象された概念である。時間も空間も、知覚されないし、知覚することにとって必要条件でもない。時間や空間が知覚内容に意味を与えるのではないし、感覚機能をもたらすものに心が時間や空間を付与するのでもない。時間や空間は、知性の産物であって、知覚の対象ではない (Gibson, 1975, p. 299)。

抽象的空間は、外界に存在する面の、ある種の影であり、抽象的時間は、外界で生じる事象の影である (Gibson, 1975, p. 295) から、空間や時間は存在せず、従って、時間の知覚も存在しない。存在するのは、事象と移動の知覚だけである。ギブソンは、生態学的な地上環境を、面と媒質と対象から成ると考えており (Gibson, 1979)、事象や移動は、空間の中で生じるのではなく、不変で永続的な環境に存在する、媒質の中で生じると主張している。

ギブソンは、「環境に生起し生活体に知覚され得る事象《events》」を生態学的事象と呼び、(1) 対象の位置の変化、(2) 面の変形、(3) 面の崩壊や生成、の3種類を挙げている。事象は必然的に、何らかの持続《persistence》と何らかの変化《change》とを伴うので、持続と変化という相互依存的概念によって、事象を記述できる (Gibson, 1975, p. 297)。ここで想定されているのは、外界に生じる変化だと言えるが、重要なのは、観察者自身の移動や行為が環境を変化させる場合もあるという事実である。

ギブソンによれば、事象は、環境に確かに存在し、動物の種類に応じて差はあれ、確かに知覚される。「物理的事象の継起に対応して生じる、現象的事象の継起が存在する」という前提はない。事象は、より長い事象の入れ子になっており、下位的事象と上位的事象とが存在する。観察者が、入れ子になった事象全体を詳細に知覚することは不可能である (Gibson,

1975, p. 298).

渡辺 (2010) は、ギブソンの言う「事象」《events》を「出来事」と呼び、次のように主張している。出来事とは、言葉の表現に依存した概念であり、それとしてのみ存在する。出来事が存在し知覚されるのではなく、知覚されるのは、身体を含む「物」である。身体を含む「物」が、知覚され語られて初めて出来事となる。時間は、空間によって喩えられているのではなく、「概念である出来事」を空間的な「物」に喩えることから生まれ出てきた、それ自身が概念である。時間という概念は、我々が社会的に共有すべき出来事を秩序立てて理解するのに便利のように構築された社会的概念である (p. 361)。「こと」には、「もの」のもつ空間的実在性がないから、「出来事」は概念に過ぎない。時間は、(概念たる)出来事を構成要素として成立している概念であるから、実在しない (p. 436)。

渡辺は、以上のように時間の非実在性を主張したが、一方で、実在の時間性を指摘している。渡辺によれば、時間は、「身体や物体が実際に存在する」というのと同じ意味では「実在しない」が、人間が知性の力でつくり出した概念が「存在する」という意味では、間違いなく存在する。また、時間は人間の行為はもちろん、森羅万象を出来事として理解するうえでも尺度の働きをしている。森羅万象を出来事と見なす限りにおいて、森羅万象は時間的存在者であり、実在は、語られて出来事として成立することで時間的存在の範疇に入ってくる (渡辺, 2010, p. 439)。このように、渡辺は、物理的時間や絶対時間が実在しないにも関わらず、私たちが知覚した事象が「時間」的な存在であること、即ち、概念としての時間は、知覚されないが、概念としては「存在するもの」として通用することを指摘している。

## 6. 「時間の知覚」探求のための存在論的な前提

「時間の知覚」という認識論的なテーマを探求する際には、「時間は存在

するか」、或いは「時間とはいかなる事柄か」という存在論的な問いと関わらざるを得ない。とすれば、「時間の知覚」について新しい認識論を示すためには、「時間」について新しい存在論を求めなければならないであろう。例えば、アリストテレスによる心の捉え方、即ち、「心とは、身体が環境に働きかける可能性を持った状態のことである」とする考え（桑子、1999, p. 203）は、「生活体の営みと切り離して心だけを語ることは、不可能或いは無意味である」というギブソンの考えにつながっており、それを支えているのは、「心と身体とは、また、環境と生活体の営みとは、それぞれが相互依存関係にある」という存在論であるが、この考えについて、「心と身体とは一体で、身体がなければ心もない」といった表層的な理解をしてしまうと、「心や身体がそれぞれ、互いとは独立に存在する」と看做す存在論から一歩も踏み出していないことになる。

ギブソンは、「空間は、概念であって、知覚されるべく環境に存在しない」と主張している。しかし、「包囲光配列（Gibson, 1979）から、空間が知覚される」と主張しているのではない。ギブソンは、「環境は、（空間から成るのではなく）面と媒質と対象から成る」という存在論を採用しているのである。

私たちは、「遠ざかる地面の上を向こうまで歩いて行ける」と直接的に知覚する。このことを、「幾何学的な三次元空間」や「宇宙空間」という物理学的な存在論を受け容れた人々が、「空間の知覚」と呼び慣らわしてきただけである。同様に、ギブソンは、「事象の知覚を通じて、時間が知覚される」と主張しているのではない。時間は、知覚されるべく環境に存在していない。

## 7. 知覚の“時間的”諸相についての試論

既に述べたように、知覚について、(1) 知覚とは、今・ここから環境について知ることであること、(2) 自己の知覚と環境の知覚とは相互依存関

係にあること、(3) 知覚は、基本的に徒手空拳で実現されること、(4) 知覚の全例について当否を確認できないから、「正しい知覚」も「間違った知覚」もないこと、(5) しばらく観察しないと知覚は成立しないこと、を指摘しておいた。このような知覚の特徴を前提として考えると、知覚の心理学という研究領域において検討すべき事柄は、物理的時間を前提としない、しかも「時間」の名の下に抽象され得る、知覚の諸事実だと言える。

以上を踏まえて、「時間」として抽象され得る知覚の諸事実についての試論を述べる。まず、知覚される事柄（アリストテレスの「感覚対象」の論に倣って言えば、「知覚対象」）についての暫定的分類を列挙する。

### (1) 事象間の前後関係

#### (a) 因果《causality》を含む多様な関係

これは、「先行する事象が、後続する別の事象の原因である」という知覚である。ある事象の直後に別の事象が生起する場合、両者間に因果が知覚される。ある事象のずっと後に別の事象が生起すると、因果は知覚されない。（但し、因果を知覚するとき、「時間の短さ」を感じるわけではない。）生活体の自発的行為に後続して何らかの事象が生起すると、生活体は自らの行為の結果としてその事象が生起したと知覚する。これは、生活体が環境に働きかける行為のなかでアフォーダンスを見出すことだと言える。このように私たちは、観察者としても行為者としても、（因果を含む多様な）関係を知覚する。

#### (b) 複数事象が同時に起きること《coincidence》

「複数の異なる出来事が、同時に起きた」という知覚である。出来事の始まりが同時である、終わりが同時である、変化の発生が同時であることなどが知覚される。同時に生起する複数事象間には、多義的な関係が知覚される。例えば、複数の対象が同時に動き始める場合には、それらのいずれもが主導的だと見える。

(c) 事象がちょうどよい機会を捉えているか否か《opportunity, timeliness》

「ある出来事がちょうどよい時に起きる」という知覚である。そこからの逸脱についても私たちは、「ある出来事が起きるのが遅すぎる、或いは、早すぎる」と知覚する。これらは、例えば、移動する対象が不透明な対象の背後に隠れた後に再び出現する事態（遮蔽とその解消）において経験される。

## (2) 同じものに生じる変化

成長・老化・故障・汚損など、“同じものに変化が生じた”ことの知覚である。私たちは、変化のうちに不変を見出したとき、変化の後で「時間が過ぎ去った」と述べる（図1）。変化の度合いが大きすぎると、「時間」を抽象することができない。或いは、「非常に長い時間が過ぎたのだろう」といった推論を行うことになる。例えば、乳児の面影を残した幼稚園児を見ると、その子の成長や「時間の経過」が感じられるが、長年会わなかった、子供の頃の面影を全く残していない成人と再会しても、「時間の経過」は感じられ難い（図2）。

変化や不変は、アリストテレスの言う「特殊感覚の対象」（即ち、色・音・匂い・味）にも、「時間」を除く「共通感覚の対象」（即ち、運動・静止・数・形・大きさ）にも、知覚される。色・音・匂い・味の変化は、運動の特例が静止であり、数の増減、形の変化、大きさの変化などは、事象に複合的に組み込まれており、例えば、壺の中のいくつかの角砂糖のうちの一つを紅茶に入れると、角砂糖は紅茶に溶け、その形と大きさが変化し、壺の中の角砂糖の数は減少する。私たちは、この事象から「時間の経過」を抽象する。また、時計が表示しているのは、まさにこの、「同じものに生じる変化」である。腕時計そのものの形や色は、何度見ても同じだが、時針・分針・秒針の位置は、見るたびに变化している。

### (3) 事象の始まりと終わり

ずっと続く事象とすぐに終わる事象を比較するとき、私たちは、「時間」の概念を用いて、「持続時間の長短」を抽象するが、私たちは「事象の持続」そのものをではなく、事象が“まだ終わらない”ことや、“今ちょうど終わった”こと、或いは“もう終わった”ことを知覚している。例えば、「現在過ぎつつある長い時間」として抽象されるのは、ある事象がまだ終わらない、続いているという知覚、或いは、“疲れた”、“飽きた”、“退屈だ”といった「今の私」に関する知覚であり、「既に過ぎ去った長い時間」として抽象されるのは、“時計の針の位置が大きく変化していた”ことの知覚である。

### (4) 同一と見なされる事象の（反復回数の）多寡

一般的な円形の時計には、針の周回変位が反復的に呈示されている。秒針の1回転が分針の、分針の1回転が時計針の、それぞれ1単位の変位と同期している。このような形式的な入れ子構造を持った回転運動の反復を知覚し、反復の回数を数えることから、「長い時間の経過」という概念が抽象される。

「長い年月の経過」は、陽が昇り陽が沈むことの反復が多いことの知覚や、四季の繰り返しの回数の知覚など、同じ事柄の繰り返しの多寡から抽象される。また、例えば、“今日は私の50歳の誕生日だ”といった知覚は、同じ事柄の周期的反復の知覚であり、暦という抽象的尺度に位置づけられるが、「私は50年前からずっと変わることなく、私という同じ人間だ」という同一性或いは一貫性の知覚と、私に生じた「老化」と呼ばれる変化の知覚とを伴う。

### (5) 「過去」や「未来」に関する「今」の知覚

回想・思い出・後悔・繰り返し言などは、「過去」の名の下に抽象化された

事柄に関する、「今」の知覚である。例えば、“あの時、ああしておけばよかった”と思うのは、「今」である。また、予期・予測・不安・希望などは、「未来」の名の下に抽象化された事柄についての「今」の知覚である。例えば、夕食のために餃子を包みながら、“この調子だとしばらくかかりそうだ”と知覚することは、観察者として、家人が餃子を包むのを見ながらも、或いは自らが行為者として餃子を包みながらも、いずれも可能である。

以上が、「時間」として抽象され得る知覚の諸事実に関する、暫定的な分類である。暫定的な分類であるから、今後さらに整理されなければならないし、ここには書き漏らされている事実が見出される可能性もある。外界に存在しない概念を知覚の対象と見なしたまま、概念である「物理的時間」からの逸脱として、主観的世界にのみ属した「心理的時間」を論じるようなアプローチによる「時間知覚」研究から脱して、環境における生活体の行為としての事象知覚を検討すれば、「時間」の名の下に抽象され得る知覚の諸相がさらに明らかになるであろう。

これらの諸事実は、いずれも知覚可能な事象として環境に存在するが、「時間」として抽象され、「時間」の名の下に語られる。既に述べた通り、渡辺は、知覚され語られて出来事となった森羅万象は、概念として時間的存在者となると主張している（渡辺, 2010, p. 439）。この主張において、「知覚」がいかなる事柄として捉えられているのかは明らかではないが、「知覚され語られて出来事となった」事柄、即ち、知覚および記述から生じた概念が、時間的存在者であることを指摘している。このように知覚は、「時間」の概念を生み出す契機と位置づけられているが、ここで忘れてはならないのは、知覚それ自体が時間的な存在者だということである。



(a) 食事の前



(b) 食事の後

図 1. 「過ぎ去った時間を感じる」とは、変化の中に不変を見出すことである



(a) 若かりしデカルト（部分）



(b) デカルトの肖像画（部分）

図 2. 変化が大きすぎると、「過ぎ去った時間」は感じられ難い

## 8. 知覚が「時間」を生み出す

本稿では、「時間の知覚」という語法が変則的であり、ギブソンの主張通り、「時間」は概念であって知覚されるべく外界に存在していないが故に、「時間を知覚する」ことはできないことを指摘した上で、「時間」として抽象され得る知覚の諸相（知覚の“時間的”諸相）に関する暫定的分類を示した。この過程で、「現実世界とは独立のものとして想定された概念



である、物理的時間からの逸脱」としてしか言及されない、「主観的」な、或いは「心理的」な「時間」について探求することを退けた。このことは、著者がギブソンの生態学的知覚論の立場を受け容れていることを反映している。ギブソンの知覚論では、知覚を、外界に由来する像や印象（の形成）と見なすのではなく、「環境と生活体との相互依存関係として成立する生態学的事象」、即ち、「生活体が環境において達成する行為」と見なしている（Lombardo, 1987）。知覚が生態学的事象である限りにおいて、知覚の“時間的”諸相や持続性は、主観や像の持続性ではなく、環境と生活体との双方の持続性、さらに、生活体の知覚行為の持続性に立脚している。既に述べた通り、アリストテレスは、時間を（自己の活動と外界で生じる運動との両者を含めて）「運動なしにはあり得ないもの」（山本, 1977, p. 61）と捉えていたが、この考えは、外界の変化や生活体の活動がなければ、「時間」と呼ばれる事柄は成立し得ないということを、まさに指摘している。私たちは、「流れ続ける時間の中で生きている」のではない。私たちは、持続し変化する世界の中で生き、知覚し抽象し続けることで、「流れ続ける時間」の概念を生み出し続けているのである。“Tempus fugit（時は過ぎ行く）<sup>3</sup>”という格言は、「時」がいかに貴重であるかを語っているが、同時に私たち一人一人の生命に終わりがあることをも指摘している。過ぎ行く「時」が貴重であるのは、もとより有限の生命をしか持たない私たちが知覚から生み出せる「時」が、絶対時間とは違って有限だからである。

## 謝 辞

常に的確かつ有益な示唆を与えてくださる増田直衛先生に、この場を借りて御礼申し上げます。

<sup>3</sup> 慶應義塾大学図書館旧館の時計塔の文字盤に刻まれたラテン語で、「光陰矢の如し」とも訳される。

## 引用文献

- Gibson, J. J. (1975). *Events are perceivable but time is not*. In J. T. Fraser & N. Lawrence (Eds.), *The study of time II*. New York: Springer-Verlag. pp. 295-301.
- Gibson, J. J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Houghton Mifflin Company.
- (ギブソン, J. J. 古崎 敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬 旻 (訳) (1985). 生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る— サイエンス社)
- Gibson, J. J. (1982). *Reasons for Realism: Selected Essays of James J. Gibson*. (Reed, E. & Jones, R. (Eds.))
- (ギブソン, J. J. 境 敦史・河野哲也 (訳) (2004). ギブソン心理学論集「直接知覚論の根拠」 頸草書房)
- 桑子敏雄 (1999). アリストテレス「心とは何か」(訳) 解説 講談社
- Lombardo, T. J. (1987). *The reciprocity of perceiver and environment. The evolution of James J. Gibson's ecological psychology*. Lawrence Erlbaum Associates.
- (ロンバード, T. J. 古崎 敬・境 敦史・河野哲也 (監訳) (2000). ギブソンの生態学的心理学—その哲学的・科学史的背景— 頸草書房)
- 松田文子 (1989). 時間知覚 新版心理学辞典 平凡社 pp. 292-295.
- 渡辺由文 (2010). 時間と出来事 中央公論新社
- 山本光雄 (1977). アリストテレス—自然学・政治学— 岩波書店